

地上に降りた女神たち

琴座の大志館

1章 目覚め

vegagee

A night view of a city with many colorful lights, possibly a festival or a large gathering. The lights are arranged in patterns, and there are some bright spots that look like fireworks or large displays. The overall scene is vibrant and festive.

1.南千住界限

上野駅から常磐線に乗って3つ目の、南千住駅に降り立った異元信次は、駅前にそびえ立つ高層ビルを見上げて少し違和感を感じてしまった。

事前に地図を見たとき、日雇い労働者の街で有名な山谷が近くにあったから、きっと、マンガの「あしたのジョー」に出てくるような人たちが沢山いて、町並みも映画「三丁目の夕日」のようなノスタルジックな世界が広がっていると思っていたからだ。

だから、延命寺でちょっとした大仏並みの大きさの首切り地蔵に驚き、回向院で幕末の天才思想家兼教育者の吉田松陰先生のお墓に手をあわせてから、骨通り商店街を北の方に歩き始めて、だんだんに人通りが少なくなって、最初にイメージしていた雰囲気は漂ってくると安心したのだった。

ただ、平日の昼下がりだということのにあまりに人が少ないのには驚くしかなかった。人がいたのは、駅前の高層ビルの周りから、重厚な作りの銀行までで、それをすぎると、大阪の大学の友達にバカにされた信次の地元の、奈良の商店街に比べても、人が少なく（本当にここは東京なのだろうか、この商店街の人たちはどうやって暮らしているのだろうか）と、思わず心配してしまうぐらいだった。

気がつくとも、商店街の終点の日光街道まで来ていた。向かい側には「すさのお神社」があり、右に折れてもう少し行くと、江戸時代の俳人、松尾芭蕉が奥州へと旅だった出発点、「千住大橋」という道路標識が出ていた。

信次は横断歩道を渡り、骨通り商店街を駅に向かって、戻り始めた。

（確か、このへんなんだけどな）父に見せてもらった、年賀状の住所を控えてあるメモを取り出そうとしながら、フツと見上げると、ちょっと変わった看板が目にとまった。

それは、薄い文字で、「ベガ薬局」と書いてあるのだが、重なるように「琴座の大志館」とも書いてあるのだった。古い看板の上に重ね書をしているのではなく、見る角度によって浮き出す絵が変わる、シールのような感じだった。（薬局なのか、大使館なのかどっちなんだよ、しかも大使館の「使」の字が違うし、いや、そもそも東京とはいえ、こんな場末の商店街に大使館があるはずがないし、っていうか、琴座なんて国があるわけないか）でも、年賀状に書かれてあった「天之川竜子」という人について、何かわかるかもしれないと

思った信次は、その店の前に立ってみた。

真っ黒なガラス一面に天之川が描かれている自動扉のボタンにふれると、扉はスッと開いた。そこは2 m四方ほどの、駅によくある、向かい側にも扉が付いているエレベーターの内部のようだった。

普通は扉の横に付いているはずの、行き先階のボタンが見当たらないので、信次は戸惑った。後ろの扉の横にも、何も付いておらず、閉じ込められてしまったのだ。

(天之川竜子さんに会いたいんだけどな) そう思った瞬間、前の扉が開いた。

そこは、ホテルのロビーのようだった。床は大理石で、柱はギリシャ風だった。20畳ほどのスペースで、壁際にソファが置いてあり、外国人らしい旅行者が2人ほど座って待っていて、カウンターでも、別の外国人旅行者が3人ほど、交渉しているようだった。(そういえば、南千住には、安宿がたくさんあって、世界中を安く旅行している、バックパッカーたちが集まってくるってネットに書いてあったな) 信次がキョロキョロしていると、ここの施設の従業員らしい制服を着た女性が近づいてきた。

「どうなさいました」身長は170cmぐらい。髪は赤毛で、これまた信次の好きな松本零士のアニメに出てきそうな美人だった。信次はしどろもどろになりながら、

「表の看板にベガ薬局って書いてあったと思うんですが、ここは、薬局じゃないみたいですね」と聞くと、

「ええ違います、たまにいらっしゃるんです、お間違えになられて、入って来る方が、どうぞこちらへ、

薬局の場所を地図で説明しますから」と、隣の小部屋に連れて行かれた。

壁には南千住界隈の地図が貼ってあり、

「少し暗いのでライトで説明しますね」と言いながら、見覚えのあるペンライトのようなものを取り出した。

それは先日、奈良の大仏の裏で、美希が持っていたのと同じ物のような気がした。

(あの光を当てられたら、記憶を消されるか、何処かに飛ばされるかどっちかだ!)

信次は急いで、話しかけた。

「記憶を消さないでください。僕は異元信次、異元琴美の息子です。亡くなった母の事を知りたくて、

父の所に届いていた年賀状を頼りに、奈良からやって来たんです。

天之川竜子さんという方を探しているんです。母の唯一の親戚だと聞いたもので・・・」

黒髪の美人は驚いた表情で、「じゃあ、あなたが、今度のミッションで、地球人に宿った人ね

でもあのミッションは、レプの妨害にあって中止になったって聞いたけど・・・」

「地球人に宿った？ミッション？レプ？」信次が何もわからずオオム返しに聞くと、

「知らないの、もしかしてあなた情報遮断されてるんじゃないか・・・。私よけいな事しゃべっちゃたみたい。

ごめんなさい、やはり記憶を消させてもらいますね」そう言って再びライトを向けたので、信次は思わず、記憶が消されても、すぐに脳のシナプスが元に戻るように念じながら頭を手で覆った。

次の瞬間、ライトが光ったみたいだが、何処にも飛ばされず、記憶も消されずに済んだ。

「うそ、あなたヒーリングパワー使えるんだ、しょうがないわね、じゃあ瞬間移動で奈良に戻ってもらおうわ、

そうすれば、いくら記憶が残ってても、今日の昼間に東京で、私に会ったなんて、つじつまが合わなくて、

誰に話しても信用してもらえないんだから」

「ちょっと待った。さっき、レプって言ってたよね、レプの妨害にあってミッションが中止になったて、

それが君たちの敵なんだろう？だったら、僕を奈良に飛ばして、僕が周りの人たちに、今あった出来事を

言いふらしたら、普通の人には変に思うけど、そのレプとかいう人のスパイがもし聞いたら、この情報がばれちゃうと思うんだけど」

このまま奈良に追い返されたくないため、半分でまかせで言ったのだが、赤髪の女性には効いたようで、

「なかなか頭が回るじゃない。しかたない、ちょっと乱暴になるけど悪く思わないでね」と言うなり、

2mはある巨大な黒ヒョウに変身した。トワイライトに出てくるオオカミ人間のように、服は破れるのではなく

消えてしまっていた。

信次は驚きのあまり、ほとんど抵抗できず、あっという間にうつ伏せに押しえつけられた。

「腕が使えなければ、ヒーリング出来ないでしょう。記憶を消してから、奈良に帰ってもらいますね」

黒ヒョウは、口にライトペンをくわえて、信次に向けた。

「そこまでにしなさい。舞」扉が開いて、もう一人女性が入ってきた。

「信次くんね。私がこの大志館の館長、天野川竜子。あなたの母、「琴美」の姉です」

信次は天之川竜子と名乗った女性を見て驚いた。彼女は大好きな銀河鉄道999に出てくる女海賊クイーン・エメラルダスにそっくりだったのだ。

2. 母は救世主の武器？

ガラスのテーブルを挟んで信次の正面に天之川竜子が、その隣に天之川舞が座った。

「それで、信次君は私に何の用なのかしら」とエメラルダスにそっくりな竜子が言った。

信次は、大仏殿での出来事を話し、あの時、会った女性が本当に自分の母なら、もう一度会いたいのだと伝えた。

「信次君、あなたのお母さんは死んだのよ。私も火葬場で立ち会ったわ。あなたが見たのはきっとまぼろしじゃあ・・・」

「絶対まぼろしなんかじゃないです。お願いですから誤魔化さないでください。鹿が人間になったり、

瞬間移動させたり、さっきの舞さんの変身だってそうだし、なにより母から遺伝したとしか思えない

僕のこの不思議なヒーリングパワーは何なんです。あなた方が宇宙人か、あるいはタイムマシンで未来から来た人間としか思えないですよ」

「会ってどうするの」今度は舞が聞いてきた。

「僕を産んでくれたこと。そして、あの事故の時、僕を含め、多くの人を助けてくれたことのお礼をいいたいんだ。それと、父さんの後ろ姿が寂しそうで見えてられない。

できれば、父さんに一度でいいから会ってあげてほしいと頼むつもりなんだ」

じっと話を聞いていた、竜子がゆっくりと口を開いた。

「わかったわ、正直に話すわね。あなたが想像しているとおおり、私たちは琴座のベガから来た宇宙人よ。

ベガ星は地球に比べると1000年以上科学技術が進んだ星で、ベガ星人はヒーリングパワーとトランスフォームの能力を持っているわ、あなたのお母さんの琴美もそう。

だから当然、その血を半分引いているあなたには、ヒーリングの能力があるのよ」

理解するのに1分？いやもっとかかっただろうか、われに帰った信次は、

「正直に話していただいて、ありがとうございます。じゃああの時の女性はやっぱり母さんなんですね。

でも母さんは、なぜ生きているんですか」

「確かに琴美は、あの時死んだわ、ヒーリングパワーを使い果たしてしまってね。

それを知った私たちは、その後すぐに、宇宙船に引き上げて蘇生手術を行ったの。

でも蘇生には3日ほどかかってしまって、琴美が起き上がるようになった時には、ダミーの琴美の体は火葬された後だった・・・。

残念だけど、この事は人間であるあなたのお父さんの「悟」さんには話せないわ、宇宙協定違反になってしまうから」

半分ベガの血が流れている信次は、グレーゾーンなのだろう。

全てではないにしろ真実を話してくれた竜子に、信次は感謝の思いが湧いてきた。

「わかりました。僕に話してくれたこと、とても感謝しています。ところで、大仏殿で母さんを見たとき、

とても忙しそうな感じがしたんですが、あれは、何をしてたんですか」

信次は大仏殿での様子を思い出しながら尋ねた。

「琴美は今、救世主の武器の一つとして活動しているの」

「救世主？武器？」意味がわからず、ぽかんとした顔の信次に竜子が告げた内容は衝撃的な話だった。

竜子の説明によると、人類には3億年もの長い歴史があり、その間、数多くの文明がこの地上に、

起こっては消えていったということ。

そして、1万年前から勃興しはじめた現代の文明も、今、滅びの道に入るか、

それとも無事に生き延びられるかの大転換期に来ているということ、

宇宙の創造神は人類を生き延びらせるため、

自らの一部をと救世主として日本に送り出されたこと、

そして、その救世主をお守りし、サポートする、宗教団体が出来ていること。

また陰ながらその救世主を守る宇宙人のチームも、いくつか存在している一方で、

この混乱につけ込んで地球を支配しようとする宇宙人の（その星の人類自身が文明を破壊しようとするときは、宇宙人が介入しても宇宙協定に反しないらしい。

またそれが彼女たちの敵対勢力であるレプタリアンらしい）勢力もあるということだった。

今度も理解するのにしばらくかかった信次は、

「あの、僕はその、宇宙の創造神とか、救世主とか、いまいち信じる事が出来ないんですが、それに救世主が、日本に生まれてきているなんて、さらに信じられないんですが」と尋ねた

「あなたねえ、大仏様の足下で、お守り売って暮らしてるのに、

創造神や救世主を信じられないってどういうことよ」

舞がまた黒ヒョウに変身しそうな勢いで言ってきた。

「舞、今の日本は信仰を持っていることが恥ずかしいことのように見られる異常な国なんだから、

信次君の反応のほうの方が普通かもしれないわ」竜子は、胸のワッペンを押して、

「ブリッジ、聞こえる。3人を転送しなさい」と言った。そのとたん、アメリカの古いSFドラマのように、

信次たちは、宇宙船に転送されていた。

窓の外には、青い地球がぽっかりと浮かんでいた。あまりの出来事に声がでない信次に

「私たちの宇宙船にテレポーテーションしたの。どう？私たちの科学技術が地球より1000年は進んでいることが、少しは理解できたかしら。私たちから見れば、地球人の暮らしなんて、原始人の様に見えるわ。1000年進んでいる私たちが創造神や救世主を信じていて、原始人である地球人が信じないなんて、無知というか傲慢というか、本当にあきれることだわ。宇宙の創造神がないと言い張るなら、まずは私たちの科学技術を超えてから、言ってほしいものだわ」

竜子に諭され、圧倒的な科学技術の差を見せつけられた信次は素直にあやまった。

「すみませんでした。確かに僕は傲慢なのかもしれません・・・」
青く浮かぶ地球を見ながら、しばらく考え込んでいた信次は
「最後に一つだけ質問していいですか？母は、僕や父の事をどう思っているんでしょうか」
「もちろん愛していると思うわ、でも琴美は、家族への愛より、救世主への愛、宇宙の創造神への愛を優先しているんだと思うの」

「神への愛を優先」（それって、過去の偉人と呼ばれる人たちと同じじゃないか）信次は、自分の事を最優先に考えていた自分と母のスケールの違いにショックを受け、自分の心の狭さが恥ずかしくなった。
地球に戻った信次は、リュックを肩に担ぐとペコリと頭をさげ、
「いろいろ教えてもらってありがとうございました。自分の事しか考えていなかったことが恥ずかしくなりました。
母さんや、みなさんは、すごい人だとわかりました。
なぜ、自分が就職試験に落ち続けたのか、わかった気がします。
突然押しかけて、すみませんでした。
母さんに会ったら、産んでくれて、そして助けてくれてありがとうと、伝えてください」と言うなり、外に飛び出した。

信次は足早に駅に向かった。なんだか無性に恥ずかしかった。
母や、あの宇宙人たちが、人知れず、人類のために活動していることも知らず、自分のことばかり考えて生きていたことを、自分のいたらなさを、鏡に映し出されたように感じだった。

信次が南千住駅に着くと、どうやって先回りしたのか、改札の前に、舞が仁王立ちして待っていた。

「母さんが、じゃなくて館長がね。もしよかったら、大志館で働かないかって」
「え」信次が返答に困っていると

「ほら、あなたからもお願いしなさいよ」と舞に言われて、柱の陰から女性が出てきた。
それは、ピンク色の髪をした、信次の妹？の美希だった。

3. 過去世は夫婦？

駅前のハンバーガー店は細長い作りになっていた。

お客はそれほど多くなく、カウンター席もBOX席も半分ぐらいが埋まっている状態だった。

一番奥のBOX席の壁側に舞と美希が座り、向かいに信次が座った。

「この前はありがとう」信次は大仏殿で美希が命令に逆らって、

記憶を消さないでくれた事の、お礼を述べた。

母は美希を妊娠中に亡くなっているから、本来なら話すどころか、会うことさえなかった相手が

、

どういう訳か美しい女性に成長して自分の前にいることが、不思議でならなかった。

しかも妹だと言うのに、恋人に会っているようなドキドキ感に、戸惑いを覚えた。

「いえこちらこそ、急に転送してしまってすみませんでした・・・」美しい目で見つめられた信次は

何も言えず、しばらく沈黙が続いた。

「ああ、もうじれったいわね。過去世で、何回も結婚している仲なんだから、いまさら、はにかみ合ってて

どうすんのよ、もっとパパッと話せないの」と舞が早口でいう

「過去世で結婚って？いったい何の話」信次が戸惑っていると、

「信次さん、いえ信次兄さんは、地球人として、転生したときに記憶が消えているのよ。

それに、過去世とか、

そう言った事は今の日本では、家庭でも、学校でも全く教えてもらえないから、

順を追って説明しないと無理よ」と美希が弁護した。

美希たちの話は、先ほどの天之川竜子の続きのような話で、信次にとっては、前回にも増して、信じられないようなショッキングな話だった。

なんでも、地球人は猿から進化したのではなく、今から三億年ほど前に、創造神によって最初から

人間としての肉体と魂が作られたのだという。

魂は肉眼では見えない4次元以降の思考するエネルギー体であり、肉体はその魂が3次元世界で生活するための、いわば潜水服のような物だと言う。

そしてこの世に生まれるとは、肉体に魂が宿ることで、死ぬということは、肉体から魂が離れることだと。

魂は消滅することなく、4次元以降の世界に帰り、数百年経過すと、また別の肉体に宿る。

そして、何度も肉体に宿って、3次元世界で、さまざまな体験を積んで、

より高度な思考エネルギー体へと、進歩し続けているのだという。

今回、美希の魂は信次に続いて、地球人として肉体に宿ろうとしたが、母が死んでしまい、ベガに戻ってきたのだということらしい。

「そんな話、聞いたことが無いな。僕が教科書で習ったのは、遙か昔の原始の海の何処かで、偶然にタンパク質ができあがり、そこに偶然、カミナリが落ちて、その電気エネルギーを触媒にして偶然に生命が誕生したということ。そして、少しずつ、魚類から、両生類、爬虫類、哺乳類と進化していき、ついに数百万年前に猿人類から、枝分かれして人類が誕生したんだと、ダーウィンの進化論を元に教えてもらったんだけど」

信次の疑問に舞は持っていたコーラをテーブルに置くと、

「その話、偶然が多すぎない？偶然に生物ができたって簡単に言うけど、それじゃあもし、セメントや木材や瓦やガラスが偶然に近くに転がっているとして、そこに偶然に台風がやってきて、

偶然にセメントが雨水で練り上がって、偶然に風で柱が立ち上がり、

偶然に屋根の上に瓦が乗かって、家が建つ事があると、本気で考えるわけ？」

「そう言われると、確かに疑問な部分があるけど、でもダーウィンが見たガラパゴス諸島には、食べ物の種類に合わせて、くちばしが変化している鳥がいるわけだから、進化論もあながち間違いじゃないんじゃないかな」

「あのねえ、ダーウィンなんて、自分が死んだ事も理解できず、地獄の最深部でのたうち回っている魂を信仰するのはやめなさいよ」

「地獄って、そんな原始人のような考え方は・・・」信次はそこまで言って、ベガ星人たちが、科学技術で自分たちより1000年は進んでいることを思い出した。

「私たちより、1000年遅れてる原始人に原始人呼ばわりされたくないわ」

「ごめん」

「舞、そんな言い方は失礼だわ、それに信次兄さんは、半分ベガの血が入ってるんだから、原始人なんかじゃないわ」

そこから、丁寧に美希が教えてくれたことは、

エネルギー体である魂には、個々の魂の個性による波長があり、5次元、6次元、7次元と高次元になるほど精密な波長になっていて、その魂群が集まっている部分を天国と呼び、闘争と破壊や嫉妬心などを出している波長の魂が集まっている所を地獄と呼んでいるのだということ。

そして波長同通の法則があり、受精卵に魂が宿るには、ある程度精密な波長でなくてはならず

、
地獄界の魂は母体に宿れない、つまり地獄界からの生まれ変わりは出来ないのだということだった。

「なるほど。でも一つ解らないのは、どうして僕や美希がこの時期の日本に、生まれようとしたのかということだよ」

「それはさっき、館長が話してた、救世主をお守りすることと、日本とベガの通商条約を友好的に結ぶためよ」

「通商条約って、幕末にアメリカとかと結んだ貿易とかの条約のことだろう？
あなた方から見れば1000年も遅れている地球と貿易してメリットなんてあるのかな」

「それが大ありなのよね、私たちベガ星人は何にでもトランスフォームできるでしょ、一見すごい能力だけど、それは見本があるからなの、つまりコピーする能力は優れているけど、オリジナルなものを作り出す能力が弱いよ。地球は確かに科学技術では、私たちより遙かに遅れているけど、変化が激しくダイナミックで、次に何が起こるか解らない、おもしろい星なの。だからある意味、宇宙人たちの注目の的になってるわ、
私たちが確認してるだけでも20種類以上の星から宇宙船が来てるのよ」

「そうなのか？でもそんな情報、テレビでも新聞でも一切報道されてないけどなあ」

「本当なんです。今の日本は情報統制されていて、先ほどの救世主や、あの世の世界の話と同様

、
宇宙人の存在を信じているなんて言うと、キチガイ扱いされてしまいますけど・・・
信次兄さんが、大志館で働いてくださればもっと詳しい話ができるんですが」

「どお？うちで働いて見る気になった？」

赤髪とピンクの髪的美女に見つめられた信次は思わず頷いた。